右／避難広場でドッジボールを楽しむ子どもたち
下／仲良し３人組、左から志内君、山本君、髙木君。みんないい笑顔です

初夏の風と戯れて

地区に設置された避難広場から、子どもたちの声が聞こえてきました。遊んでいたのは飯野小に通う志内龍翔君、山本陸翔君、髙木一誉君です。初夏の風と戯れるように、無邪気にボールを追いかける3人の笑顔がまぶしく映ります。

広場で汗を流した後の彼らの楽しみは、髙木君のおばあちゃんが作る焼き芋を頬張ること。彼ら曰く「ものすご～く甘くて、口の中でトロトロ～って溶けるけん」。そんな話を聞かせてくれた後で「俺たち、広報紙の『わがまち散歩』に載ると？やったー」と大喜びです。こうして、幅広い読者層に支えられていることを心からうれしく思います。

命から2番目に大切なミシン

飯野小で、家庭科の授業の補佐をしているという髙木信子さんに出会いました。「小学校から依頼を受け、家庭科の授業の際、ミシンの使い方や小物作りのお手伝いをしています。作品には子どもたちの性格が出て面白いですよ」と目を細めます。

信子さんが和裁を始めたのは16歳の時。「『手に職を持てば食うに困らない』と親に勧められ、和裁の学校に通いました」と振り返ります。

21歳で結婚し、嫁入り道具に持ってきたのが、60年たった今も現役で活躍している電動ミシン。「私にとっては、命から2番目に大切なもの」と信子さんは思いを寄せます。

以前仕立てたという、色留め袖を見せてもらいました。深い山吹色に季節の花々が描かれ、美しい縫い目に着物の品格が漂います。久しぶりに眺めた着物を前に、本人しか知らない思い出が込み上げたのか、信子さんはしんみりとなりました。

実は4年前、大工だった夫の勇一さんが82歳で亡くなりました。今も悲しみは癒えない信子さんですが、勇一さんが建てた家の庭先で遊ぶひ孫たちの姿や、家族の洗濯物の多さが、寂しさを埋めているのではないでしょうか。

上／60年前に信子さんと一緒に嫁入りした電動ミシン
左／信子さんが仕立てた色留め袖

右／「家族や集落の人たちに温かく支えてもらっています」と話す信子さん

盆栽仲間が集まって

盆栽が趣味という、矢野定さんのお庭にお邪魔しました。フジ、シャクヤクの花を始め、クロマツやシンパク、ツバキなど立派な仕立てが並んでいます。

矢野さんが盆栽を始めたのは60年ほど前のこと。親戚の人からクロマツの鉢を譲り受け、それを世話する内に、盆栽に魅了されていったのだそうです。「道沿いの家だからか『盆栽を見せてください』と声掛ける人が多くてね。互いに盆栽という共通の趣味で親しくなってね。そこで、盆栽を眺められる庭の一角にお茶を楽しむテーブルば用意したとたい」と話す矢野さんは楽しそうです。

89歳になる矢野さんは若々しくて健康的。妻の美恵子さんが作るおいしい料理のおかげだそうです。「家内が作るとはなんでんうまかばってん、特に白ご飯がうまかとたい」とドヤ顔の矢野さん。そこで美恵子さんから、こだわりの米の炊き方をご指南いただきました。

「米をといでざるにあげ8時間ほど置くのがポイント。私は前夜の9時頃に仕込み、翌朝の5時まで置い

矢野さんが盆栽を始めるきっかけとなった、60年前に譲ってもらったクロマツの盆栽